

## 共感

「際どい中間あたり」を視つめる内田友子さん

### 八田 千恵子

二〇〇七年十月、初めて当会の例会に参加した。読売新聞で、内田友子さんの「へ平和運動」の描かれ方」に焦点を当てた「原爆文学研究」4号の紹介記事を見て申し込んだのだった。

その日の発表は、内田さんの「青来有一『爆心』の位置」と、中野和典さんの「触媒としての身体—大田洋子『暴露の時間』論—」。参加者は十二名だった。自己紹介で若い方が、『労働歌集』を古書店で見つけたが、「原爆許すまじ」が載っていた、あれは労働歌だろうか、と話されると、「ふるさとの街焼かれ 身よりの骨うめし 焼け土に……」と歌いだす方があり、すっと私の緊張がほどけた。

内田さんは「爆心」の位置」を、平和公園の背後に高層マンションが建ち、公園を訪れる人たちの視界に入った、という新聞記事の紹介から始められた。これをどう思うか学生たちに聞くと、「マズイが多かったものの、「祈念像のそばにマンションが建ってても当たり前」や、「このマンションに住んで観光客に眺められるのはイヤ」という、たぶん記事の狙いとはズレた答えがあったという。この後、私は「原爆文学研究」を創刊号からずっと読み継いでいるが、内田さんの論考の魅力のな導入部は、初めて参加したときの内田さんの声や表情とかさなる。

「江口渥が大田洋子を怒らせた」（1号『不謹慎』のゆくえ）、「年号や日付を覚えるのが苦手だ」（3号「八月十二日の原爆」）、二年前の秋、下校中の小学生が誘拐され殺害されるという事件が、広島、栃木とたて続

けに起こった」（6号『となり町戦争』と「東海道戦争」——など）である。

『爆心』所収の「蜜」には、平和祈念式典の八月九日に少年工を誘惑する人妻が描かれる。年老いた被爆体験者の言葉が体験のない者には、むなしく過ぎるようになってきている。若い人妻の不謹慎を象徴的に描くことで、「原子野」「ナガサキ」のイメージを内側から引っくり返している。それが「青来有一の位置」だと内田さんは短はれた。質疑に入り、ある方が「人妻の行為を不謹慎の言葉でくくるのはマズイかもしれない」と発言されると、内田さんは頷き、「無関心に比べると不謹慎は一歩前に進むから私は好きで、ちよつと安易に使ひすぎています」と苦笑された。

その言葉がタイトルにもなっている1号の「不謹慎のゆくえ」は、大田洋子の「一人」意識を、報道の好む全体的観点や、東京の学生が沖繩体験で感じた「戸惑い」を例示して浮き彫りにする。「一人」であるために悲痛になっていく体験者・大田洋子を書き、その上で内田さんは、戦跡を案内する沖繩の学生の説明を「酔っている」と感じてしまう東京の学生たちを書く。「体験を持たない」立場もまた、語られるべき「体験」である、と。

内田さんは「際どい中間あたり」「はずしてしまつ」「じんわりとつながる」ことが好きだ。実はこれら「際どい中間」や「はずす」は、私が心深く潜めてきた領域であることに、今、内田さんの諸論考によって気づいている。私は、障害が重くはないけれども不自由さはかなり舐めてきた、身障者手帳2級の保持者だから。『爆心』の位置」で、「ひとりぼっちで寝るのは、あまりに足の先が冷たか」とです。神さま……、お願いします。せつくすばさせてください」と祈る知的障害者の孤独を抽出した内田さんは、不謹慎が秘める荒々しい強さにも向かっていく。私も、そうしていくつもりだ。